

千刈狸の呟き

～アリの視点から考える地域医療の「働き方改革」～

縦 縞 狸

2016年9月、安倍晋三首相は、内閣官房に「働き方改革実現推進室」を設置して「働き方改革」の取り組みを提唱した。「働き方改革」を実現するための3つの柱として、①長時間労働の解消、②非正規と正社員の格差是正、③高齢者の就労促進が検討されている。最近、医療の世界にも「働き方改革」の波が押し寄せ、なにかとチェックが入るご時世となった。

『大きな組織を維持するためには、構成員が一致団結して総力をあげて取り組むべきである！ほら、道端の働きアリを見てみる！アリは地上を歩き回って一生懸命にエサを探しているではないか！見習って粉骨砕身、一丸となって働け！』というモーレツな指導者のいる組織もあるだろう。しかし、アリのうち7割も働いておらず、1割は一生懸命働かない、と進化生物学者である長谷川英祐氏は『働かないアリには意義がある』で述べている。大組織であるアリの巣と病院の類似点と相違点に関して考察し、地域医療における「働き方改革」について模索する。

単純な判断しかできないアリにも、アリの巣の仕事効率よく処理していくために、必要な個体数を必要な場所に配置するメカニズムが必要である。地道な研究により、アリには、「反応閾値の差」＝「仕事に対する腰の軽さの個体差」というモデルが分かってきた。このモデルは簡単に言うと、人間にはきれいな好きで人とそうでない人がおり、部屋が少しでも散らかると掃除を始める人とかかなり汚くなるまで掃除をしない人がある。この違いは、「汚れ→掃除」というスイッチが入る感覚が異なっているためと考えられ、「汚れ」に対する反応閾値の違いによって、「仕事を始めるタイミング」が違うのである。医療においては、患者数が急増する、すなわち仕事量が増え、休んでいた医療者も「働かなければ！」と思い始めて働き出す、という仕組みである。東日本大震災の際に、大学病院の医師も専門外の市中肺炎治療を行った、という話を聞くことがあったが、まさに最も「反応閾値が低い」医師（失礼！）をも動員したわけである。もちろん、人間には「上司の命令」という強力な刺激があるため、刺激なしでも自主的に仕事を始めたかどうかは、すなわち「医療者としての自覚」を大いに発揮して働き出

したかどうかは、当事者しか分からない。

働きまくるアリも、休息しないとベストパフォーマンスができない。働きまくるアリの残した仕事量によって、反応閾値を超えた別のアリの労働に向かわせるわけである。7割の働かないアリには、スターティングメンバーの控え選手として立派な役割があるのである。病院でも、「もうちょっと働いてもらいたい」と思う医師も、反応閾値を超えれば働き出すはず（多分）。医師全体の反応閾値を下げて腰の軽い医師となることにより、越えられない厚い壁となって立ち足はだかる仕事を分担して乗り越えうるものにできるかもしれない。また、別の機序として、越えられない壁に対して、穴を開けてくぐり抜けようとしたり、う回路を探したりするような「通常とは違う発想力を持つ変わり者医師」の出現が地域医療に何らかのヒントを教唆するかもしれない。医療だけでなく、経済や政治、文化等、さまざまな分野にアンテナを張り巡らせておくことによって、自由な発想を得る機会を増加させるだろう。

アリが一生の間にどう仕事の内容を変えていくかは、ハチなど社会性昆虫のあいだではある程度パターンがある。非常に若いうちは安全な巣の中で幼虫やこどもの世話をし、その次に巣の維持に関わる仕事をし、最後は危険な巣外へエサを取に行く仕事をする。この年齢に伴う労働内容の変化は「齡間分業」といわれ、巣全体の労働力維持に重要な役割を果たしているという。すなわち、余命が少なくなったら危険な仕事に「異動」してもらうことが労働力を無駄なく使う目的に合っている、年寄りには余命が少ないから死んでも損が少ないというわけだ。

しかし、類似性の多いアリと医療の世界では全く違う。先輩医師には「経験」がある。疾患に対する「深い造詣」がある。クレマーのような患者への「対応力」がある。何よりも、地域医療を支えてきた「実績」がある。体力だけに裏付けられた「労働力」のみで計れるものではない。だから、先輩医師には、豊富な経験に基づく助言をより積極的に行っていただきたい。『汗』よりも『智慧』をもって当地域の医療をけん引していただければ、アリごときとは違う、地域医療における「働き方改革」がより見えてくるかもしれない。